

2019年11月の行事予定表

1	金	朝の祈り会	16	土	
2	土	パイプオルガン・コンサート2時～ (米山麻美氏、井上さより氏)	17	日	伝道礼拝式、各会の例会日
3	日	総員礼拝式、永眠者記念礼拝式 長寿を祝う会、午後・墓前礼拝式	18	月	
4	月		19	火	
5	火		20	水	聖書の学びと祈り会
6	水	聖書の学びと祈り会	21	木	祈禱会
7	木	祈禱会	22	金	朝の祈り会
8	金	朝の祈り会	23	土	
9	土		24	日	礼拝式、各部会
10	日	礼拝式(聖餐式)、教会役員会、 奉仕の日	25	月	
12	火	市内キリスト教教職者会〔研修会〕 (福山・アウシュビッツ記念館)	27	水	聖書の学びと祈り会
13	水	聖書の学びと祈り会	28	木	祈禱会
14	木	祈禱会	29	金	朝の祈り会
15	金	朝の祈り会	30	土	

11月お誕生・洗礼記念日の皆様、おめでとうございます。

編集後記

今号は一見して文字が多くなりました。フォント(文字)も通常は12P(12ポイント)なのですが11Pに。読みにくかったらごめんなさい。

◇ イギリス旅行記のS君の証しを、前号のY君と同じくできるだけ編集せずに載せたかったです。

◇ 出会いの力は人を変え成長させ周囲にも波及する、と、つくづく実感しました。

◇ 2019年も早や11月。おとなの自分はどのような出会いをいただき、どのような成長があったかと省みている秋の夕暮れ。

教会月報

2019年11月

No.343

岡山ナザレン教会 月報編集委員会

本国は天にあり

「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。」
フィリピ3章20節

早いもので11月を迎え、今年もあと2か月となりました。時の経つのが早く感じる今日この頃です。

さて、毎年11月の第1日曜日(聖日・主日)は永眠者を記念する永眠者記念礼拝式を執り行ってきました。今年も全国で行われることでしょう。キリスト者として人生を終え、今は静かに眠りにつかれた諸聖徒を覚えつつ礼拝を捧げるのであります。

使徒パウロはキリスト教徒を迫害した人物でした。ダマスコ途上、幻の内にイエス・キリストと出会い、劇的な回心をする。彼は最後には十字架にかけられ殉教するのですが決して後悔することなく、イエス・キリストの僕として生涯を福音の宣教者として歩んだことを誇りにしていました。また、現在残されている彼の手紙等がカノン(聖書)とされていることは驚きのほかありません。フィリピの人々に書かれた手紙が冒頭の聖句です。その中で、注目すべきは、わたしたちの本国(本来わたしたちがいるべきところであるが、今は隠されている)こそが希望の根拠であると言うのです。そして、やがて主の来臨(再臨)の時、キリスト者は一番うろたえ姿に変えられるのです。更に想像を絶することが聖書に記されています。それは、死者も、生者も最後の審判を通して、神の国=天国=本国に入れられるのです。その時、復活の姿でお会いでき、死者との再会が可能となる希望をあなたにも許されているのであります。

牧師 永松清

2019 ハレルヤ！秋の特別集会



特別講演会☆ 10月5日(土)午後 7:00~8:00 秋らしい、まさしく講演会日和の夕べに、土肥 努先生(ナザレン教団主事)をお迎えし、テーマを”教会って何?~まことの安らぎ”と冠しての特別講演会を開催しました。(土肥先生は5歳まで岡山で過ごされ、昔を知る教会員からは、お父様に似てこられたとの声もきかれました。)

新約聖書マタイ福音書11章 28~30 節から、はじめに、私たちのいろいろな意味での“疲れ”特に人との関係での“疲れ”を語ってくださり、次に、“重荷”~責任・病気・老い・愛する者の死など~を負う疲れについて理解を広げて下さいました。自分に与えられている重荷を負うとき、その“くびき”をイエス様が共に負ってくださるのでかえって重荷は軽くなり、安らぎ・休みとなる。姿は見えないけれど、世の終わりまで共に居てくださるといふまことの安らぎを得る。礼拝は謙遜で柔和なイエスにお会いするところ。イエス様に学ぶ場、イエス様にくびきを負っていただいで休む場。ここにまことの安らぎと癒しがある、と聖書から語って下さいました。 **特別礼拝☆** 6日の主日礼拝は『命がけで守る礼拝』と題し語られたメッセージは非常に中身の濃いものでした。初代教会を見習って重要な守らないといけない4つを語られました。また、引用された使徒言行録 20:7-12 からパウロの伝道集会の状況が細かく語られ、当時の人々がどのような思いでパウロの説教を聴いていたかを学びました。今の私達がいかに恵まれた状況で信仰生活に歩めているか、また信仰の先輩方の血と涙によって日曜日が安息日になったことに深く感謝しなければと改めて思いました。そのような思いでこの教会が今日まで続いたのですから、これからは私達が！と気づきを頂けたメッセージに感謝！です。 **修養会☆** 日曜日午後の修養会は、土曜日の集会や礼拝で受けたことを7つのグループに分かれて分かち合うことに時間をさきました。土肥先生も全てのグループをまわって下さいました。3、4名ずつの少人数の話合いだったので、日頃話せないことも声にできたのではと思います。最後に各グループの発表がありましたが、「1時間も



話しあうなんてと心配したけどあつという間だった」という感想が何人かのリーダーからでした。

メッセージの中から考えさせられたこと、反省するいくつかの問題点、礼拝の中で変えたら良いと思うところ、礼拝がもしくは教会がこうであればという願い、等々多くの声がありました。記事ではあえてまとめることはしません。あつとき出たものを取捨選択してはいけないと思えたからです。(内容が貼り出されましたので、是非ご覧下さい。)あの発表の時間、場の空気が暖まってきていると感じたのは私だけではないと思います。きっと何かに続きます。(二日間で3名の新来者がありました。)



10月伝道礼拝証し S.M. 姉

私と息子が初めてイギリスへ行くきっかけになったのは、息子が英語アレルギーになってしまっていたことでした。 姉が夏にイギリスへ行くことを知り、姉と話をしているうちにイギリスへ行ったら興味を持つかもしれない、英語が好きになれるかもしれない、これはチャンスだなと思いました。その気持ちは夫へ届き、不思議なことに全て段取りよく進み、イギリスへ行けることになりました。

聖書 *フィリピの信徒への手紙 2:13* 『あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。』
それでは、息子とイギリスでのことを話します。

□嬉しかったことはなんですか？ **息子：初めて飛行機に乗ったことです。岡山空港から離陸する時、ジェットコースターに乗って猛スピードでレールを上り続けるような感じでした。富士山が見えました。山頂の雪が溶けていて驚きました。** □初めて使った英語はなんですか？ **息子：eleven years old 11歳です。 駅員さんにHow old?と突然聞かれ、小声で言ったことばです。11歳以上は切符を買わないといけなかったのですが、なかなか買えず、困っていました。そこで、駅員さんは息子に向かって、「You're ten years old from today」今日から君は日本に帰るまで10歳だからね、と言って改札を通れるようにして下さいました。駅員さんの寛容な配慮に感謝しました。**



□イギリスへ行って良かった場所はどこですか？ **息子：ケンジントン宮殿やロンドンアイです。ケンジントン宮殿は、運動公園の何十倍大きくした庭園で、日本にはあまりみないリスがいっぱいいた。池には、カモや鳩など**

野鳥が沢山いた。ロンドンアイは、観覧車で一度に20人くらい乗れます。一番高いところからロンドン全体が見えた。下で並んでいる人が砂粒のように小さく見えた。□イギリスの料理は美味しかったですか？ **息子：特に肉とスコーンが美味しかったです。** □最後に聞きます、イギリスが好きになりましたか？ **息子：イギリスの文化や食事など、行ってみて大好きになりました。英語も少しの言葉でも気持ちを伝えたら通じることがわかったので、もっと話せるようになりたいです。** (写真はマリオネットホテルの前で。)



9月29日 奨励要旨 K.F. 姉 「喜びにあふれた教会にしたい」

岡山教会も最近が高齢化が進み、なにかと支障をきたすことが多くなった。今後存続できるのか、私は一役員として危機感を感じている。新しい人に来てもらうために、対外的なイベントはいろいろやってみているが、手ごたえがあまりないのが実情である。今もっとも必要なのは、いまいる信徒の信仰の充実、礼拝の充実ではないかと思う。礼拝を充実させることで、教会自体に喜びが満ちあふれ、新しく来た人がまた来たい、と思える教会になると思うのである。

礼拝は、神との対話の場である。この世から一時離れて神から与えられる恵みを受け、神の食卓に招かれ、それに対して私たちの感謝の気持ちを表す。そして最後に使徒たちに与えられたのと同じ祝福を携えて、再びこの世に遣わされていく。私たちは漫然と礼拝に参加しがちであるが、今一度礼拝プログラム一つ一つをよく吟味し、みなが礼拝に積極的に参加することで、深い意味での楽しい礼拝になるのではないだろうか。

同時に、新来会者にとっても楽しい教会・礼拝にすることも重要である。何十年も全く同じ式次第を漫然と守り続けるのではなく、変えるべきもの、変えてはいけないものを、各々の目で見極め、時代に合った新しい礼拝の形を作って行かなければならない。会員が常に学び、考え、祈りつつ、当事者意識を持って意見を交し合い、礼拝を充実させる努力をして、新しい時代に合った礼拝の形を模索することで、教会に新しく、生き生きとして喜びに満ちた雰囲気をもたらされる。

それはきっと教会の魅力となるであろう。

教会はそれ自体が一個の生き物である。生き物は回りの環境に合わせて自ら適応して変わっていくが、個体であることには変わりはない。教会も時代の変化に合わせてつつ、教会としてのアイデンティティを保ち続けられるはずである。

みんなで活発に信仰について語り合い、祈り合い、自分が教会・礼拝を形作る一員であると自覚しつつ、新しい時代に踏み出して行こう。(本人要約)